

# 長崎のドイツ医学

森 川 潤

(受付 2017年5月30日)

はじめに

青木周蔵は、天領長崎にたどりつくと、松岡勇記とともに大村藩医の長与専斎のもとにかよう。専斎は、文久元（1861）年の春以降、中断することはあったが、3人のオランダ人教師のもとで研鑽する。諸藩の伝習生は、藩主が長崎奉行に「蘭醫傳習傍聴」を願いで、許可を得なければ、長崎の医学伝習に参加することはできない<sup>1)</sup>。専斎は、大村藩医にすぎないが、適塾の塾頭をつとめたこともあり、「病院にても扱方大に他生と違」っていた<sup>2)</sup>。専斎は、毎日、「講義の傍聴」と「病院診察の傍観」に出かけ、帰宅後は大村藩から同伴した医師や知人のために「講習」をおこなう。マンسفエルト（Constant George van Mansvelt）の「講釈」を咀嚼し、解説したものと思われる。

周蔵は、専斎の「講習」をとおり、医学伝習におけるマンسفエルトの授業、すなわち最新の西洋医学の概要をまなんだだけでなく、西欧における医学研究の動静について実情を把握する。本稿では、オランダ人教師が、医学伝習において、どのような医学教育をおこなっていたか、西欧の医学研究の動静がどのように伝習生につたえられたのか、ふたつの問題について検討する。

## 1. 学問の仕方

西欧の医学理論の本格的な移植は、大槻玄沢<sup>3)</sup>による「ハイステル外科書」の訳述を端緒とする。玄沢は、1780年代、天明から寛政にかけての時期に師の杉田玄白から「ハイステル外科書」の訳述の継続をゆだねられる。玄沢は、芝蘭堂において門生の指導にあたるが、上級者の会読には「ハイステル外科書」をもちいる。実子の大槻玄幹だけでなく、門生の烏田智的、佐々木中沢も、『瘍医新書』訳稿の「較」、すなわち校正にたずさわる。玄沢が『瘍医新書』誘導篇（4巻）を板行したのは、文政8（1825）年、最晩年の69歳のときである。

「ハイステル外科書」の原著は、ドイツ人外科医ハイスター（Lorenz Heister）が1718（享保3）年に刊行した『外科学——最新・最善の方式による傷痕外科大全』（Chirurgie, in welcher alles, was zur Wund-Arzney gehört, nach der neuesten und besten Art）である。ハイスターは、1683年にフランクフルト・アム・マインで生まれ、ギムナジウムをおえる。ギムナジウムでは、古典語、とりわけ当時の学術用語であるラテン語を習得する。ドイツのギー

セン、オランダのアムステルダム、ライデンなどの大学で医学をなまび、1708年にオランダのヘルデルウィク大学で医学博士の学位を取得する<sup>4)</sup>。ハイスターは大学を拠点として研究活動にたずさわるだけでなく、アムステルダムの病院で解剖にとりくんだり、野戦病院や軍事病院で医療活動にたずさわったりする。ハイスターは、1710年にはドイツのアルトドルフ大学に解剖学教授としてむかえられる。大学での研究と臨床現場での経験にもとづき、1718年に新しい医療機器などの銅版画を多数掲載する『外科学』を刊行する。ドイツ語版は版をかさね、ラテン語、スペイン語、英語、フランス語、イタリア語、オランダ語にも翻訳される。オランダ語版『外科学教程 (Heelkundige Onderwyzingen)<sup>5)</sup> は、アムステルダムのギルド外科医ユルホールン (Hendrik Ulhoorn) がドイツ語版第 3 版を増補訳述し、1741年に刊行したものである。

『瘍医新書』誘導篇には、下記の一節がある<sup>6)</sup>。

此科一箇ノ技術ノ學一箇ノ知理ノ學ト名ツク按ニ技術ハ原一各 [コンスト] トイフ [コンスト] ハ諸般術藝ノ統稱ナリ此業ニ名ツケル所ハ手術外治技巧ノ藝ナリ知理學ハ原一

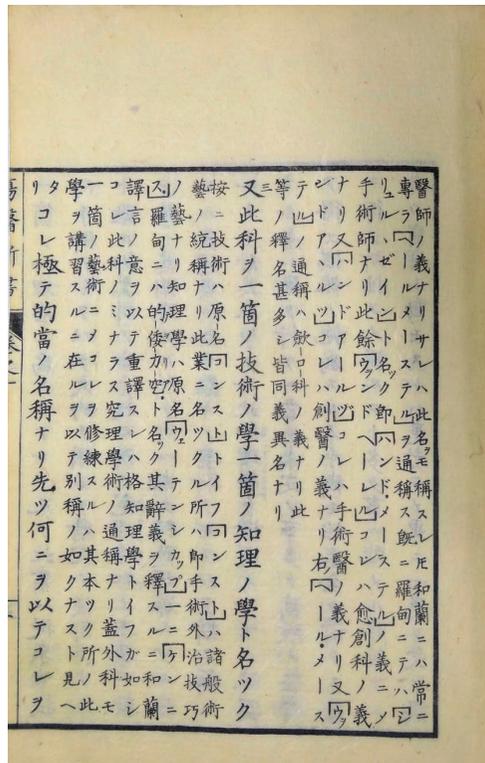


図 『瘍医新書』誘導篇卷之一

名 [ウエーテンシカッフ] 一ニ [ケンニス] 羅甸ニハ<sup>テ</sup>的<sup>ヲ</sup>-倭<sup>リ</sup>-力<sup>ア</sup>-空ト名ツク其辭義ヲ  
 釋スルニ和蘭譯言ノ意ヲ以テ重譯スレハ格知理學トイフガ如シコレ此科ノミナラス究理  
 學術ノ通稱ナリ蓋外科モ一箇ノ藝術ニノコレヲ修練スルハ其本ツク所ノ此學ヲ講習スル  
 ニ在ルヲ以テ別稱ノ如クトスト見ヘタリ此極テ的當ノ名稱ナリ先ツ何ニヲ以テコレヲ一  
 箇ノ知理ノ學ト爲ストナレハ凡ソ此業ハ從來唯技巧手術ノミヲ以テ大約ヲ領シテ時宜ノ  
 使用トナスト雖<sup>レ</sup>抑其科ノ由テ起ル所ノ究理格知ノ本源ニ就テ善ク其淵源スル所ヲ考ヘ  
 漸ク精熟明審スルニ非レハ其闔奥ニ入り難キ<sup>ウエーテンシカッフ</sup>ノ要術ナルヲ以テ斯克稱スルナリ若其本原  
 タル此知理學ヲ講究スル<sup>ウエーテンシカッフ</sup>ノ疎漏ナル者ハ術ヲ行フニ當テ未定ノ事多ク萬般ノ整齊ヲ  
 得ス

外科学は、「技術ノ学」の側面と、「知理ノ学」の側面をあわせもつ。傍線部は、割注であり、玄沢の按文である。「技術」はオランダ語の「コンスト」(kunst)である。「コンスト」は「諸般術芸」, すなわち「技術と学芸」(日本国語大辞典)を統合する名称である。「コンスト」は、外科学のばあいには「手術外治技巧ノ芸」にあたる。「知理学」はオランダ語の「ウエーテンシカッフ」(wetenschap), あるいは「ケンニス」(kennis)である。ラテン語の「<sup>テ</sup>的<sup>ヲ</sup>-倭<sup>リ</sup>-力<sup>ア</sup>-空」(theoria)にあたる。オランダ語の訳語の辞義をとり、重訳すれば「格知理學」となる。「知理学」は外科学を包摂する「究理學術」の「通稱」である。「知理学」の語句の使用事例は管見にはいらない。玄沢による造語である。

外科学は「一箇ノ芸術」, すなわち「学芸と技術」(日本国語大辞典)である。「格知理学」を修練するのは、外科学が「格知理学」の基盤のうえになりたつからである。外科は、従来、「技巧手術」の概略を領解し、施術してきた。そもそも外科は依拠する「究理格知」の本源について、その淵源するところを考え、練達し、明審明徴しなければ、その極意に達することはできない要術である。その本源である「知理学」をなおざりにすることがあれば、執刀するさいに、周章狼狽し、万事、整齊することはない。

ドイツ語原典の1724年版序章 (Einleitung) には、つぎのような記述がみられる<sup>7)</sup>。

Manche nennen die Chirurgie eine **Kunst**/ andere eine **Wissenschaft**: welche beyde Benennungen aber gar wohl passiren können. Dann man kan sie eine **Wissenschaft** nennen, weil ein angehender *Chirurgus*, ehe er practiciret, die *fundamenta* derselben vorher wohl lernen und wissen muß: dieweil er sonst gar ungeschickt und unvernünftig practiciren, und mehr Schaden als Nutzen stifften würde. Eine **Kunst** aber kan sie auch billig genannt werden, wenn man, nach vorher gelernten Fundamenten, die Chirurgie durch Heilung der Wunden, Bein-Brüchen und andern Operationen exerciret oder practiret: und dahero pfliget sie auch getheilet zu werden in die **Theorie**/ das ist die **Wissenschaft**  
 多くのばあい外科学は「技術」(Kunst) と呼ばれるが、「科学」(Wissenschaft) と呼ば

れる。いずれの呼称も通用する。外科学 (Chirurgie) を「科学」と呼んでもさしつかえない。それは、駆け出しの外科医 (Chirurgus) が普段はまったく不手際に、無思慮に診察し、効能よりもむしろ惨害をもたらすために、医療にたずさわるまえに、「科学」の基礎 (fundamenta) をじゅうぶんにまなび、知っておかなければならないからである。しかし、あらかじめ習得した基礎にもとづき、創傷、脚骨折、その他の手術により外科学を練習し、実践するばあいには、外科学が「科学」と呼ばれるのは妥当である。それゆえに、「技術」は慣習的に「理論」(Theorie) ——それこそ「科学」にはかならない——に分類される。

玄沢の按文は、ドイツ語原典の引用箇所にはほぼ符合する。「コンスト」(kunst), すなわち「技術学」はドイツ語の“Kunst”, 「ウエーテンシカップ」(wetenschap) は、すなわち「知理学」はドイツ語の“Wissenschaft”の訳語である。玄沢は、“Wissenschaft”のオランダ語訳の“wetenschap”の「意」をくみ、「知理学」と名づける。

蘭学者は中国由来の漢方医学の苗床ではぐくまれるが、やがて陰陽五行説という中国独自の哲学思想に依拠する漢方医学に懐疑的になり、西洋医学に転じる。それは、漢方医学には「方ありて法なき」<sup>8)</sup>、すなわち薬方はあるが、「法」、すなわち理論的根拠がないためである。一気留滞説(後藤良山)、万病一毒説(吉益東洞)といった経験主義的な病因・病理論が生みだされたのは、そのためである。紅毛流外科も西洋医を詐称し、漢方医学の諸説を附会するものにすぎない<sup>9)</sup>。蘭学者は、理論的根拠をもとめ、「究理」(窮理)にたどりつく。玄沢は杉田玄白や前野良沢に師事する。良沢は、「究理」について、つぎのようにしるす<sup>10)</sup>。

和蘭ノ學ヲヤ先生曾テ只醫術ヲイフノミナラス天文地理曆学數術皆蘭ヲ以テ精眞ナリトス是或ハ然ラン歟近間又頻リニ究理本然ノ学ヲイヒ (後略)

良沢によれば、「和蘭ノ学」は医学だけではなく、天文学、地理学、曆学、数学もふくむ。近年、オランダでは「窮理本然之学」という表現が流布する。「本然」は、「人手を加えないで、自然のままであること」(日本国語大辞典)という意味である。良沢の「究理」は自然科学、すなわち“natuurkunde”を意味する。玄白は、「究理」について、「逐々見聞する所和蘭実測究理の事共ハ驚入りし事はかりなり」<sup>11)</sup>と述べる。「実測究理」は「実地調査に基づく学問や研究」(日本国語大辞典)を意味する。「究理」は、陰陽五行説に支配された伝統的な思想基盤から脱却し、合理的、実証的にアプローチしようという西欧の学問方法論を意味する。

玄沢は、玄白や良沢からうけついで学問方法論を志向する。しかし、「究理」という語を意識的に避け、「知理学」という語に執着する。「究理」は、『易経』説掛伝の「窮理尽性」<sup>12)</sup>に由来する。易は、陰陽二気の消長により万物の生成変化を説く陰陽説をとり入れたものである。陰陽は、易の根本理念にはかならない。西洋医学の基盤となる「科学」と陰陽論に依拠する「究理」は原理的に異質である。玄沢は、そうした認識をもち、「科学」の祖型として

「知理学」という訳語をつくりだしたのではないであろうか。

ハイスターが『外科学』を刊行し、ユルホールンがそのオランダ語訳版を出版したのは、18世紀前半のことである。玄沢が日本に移植しようとしたのは、18世紀前半の「科学」に依拠するドイツの医学である。18世紀末までのドイツの大学医学部においては、「医者の手さぐりする直接経験が自然科学に勝っている」<sup>13)</sup> という状況であった。医学部は、「その行動の規則を、上記の二つの上級学部（神学部と法学部）のように統治者の命令からではなく事物そのものの本性から取ってこなくてはならぬ」にもかかわらず、「科学」よりも「技術」を優先するという実態がうかがわれる。

ハイスターの時代には、外科にたずさわるものは、手工業者と同様にツunftにおいて徒弟として伝統的な技術を習得し、医業に従事する。かれらは、「不學無智ノ粗工」、すなわち「膏薬売り」(broddelaurs)、「混堂主人」<sup>セントウヤバンタク</sup>に類し、外科を兼業するもの、散髪屋 (baard schrapers) と呼ばれる。そうした状況のなかで、ハイスターは医学に「科学」の基盤をあたえるよう主張し、実践する。ドイツでは、伝統的に外科の地位は低かったが、ハイスターはドイツにおける「外科の地位」の向上に貢献する<sup>14)</sup>。

玄沢が、40年ものあいだ『瘍医新書』の訳述にたずさわわり、オランダ語版の序章（誘導篇）を訳了したのは、ハイスターの思想に共感したからである。『瘍医新書』訳文をみるかぎり、「知理学」の具体的な内容を窺い知ることはできない。しかし、医学に「科学」の基盤をあたえようという思想は、江戸蘭学の中核にある玄沢のもとから、門生を介し全国にひろまる。江戸では、芝蘭堂四天王のひとりである宇田川玄真から坪井信道へとうけつがれ、蘭方医、すなわちオランダ語により西洋医学をまなぶ人びとのあいだに浸透する。

「知理学」という概念は受け入れられることはなく、「究理学」という名称が定着する。「究理学」書は、もともと日本には存在しなかったが、天保年間（1830～1843）以降、青地林宗の『気海観瀾』（文政10年刊）、川本幸民の『気海観瀾広義』（嘉永3年成稿）、広瀬元恭の『理学提要』（安政3～6年刊）といった医学の基礎学としての「究理学」の訳述書が板行される。

広瀬元恭は、文政4（1821）年に甲斐国巨摩郡藤田村に生まれ、15歳のころ、江戸におもむき、坪井信道に師事する。10数年後に京都で開業し、時習堂をひらく。かたわらドイツ人イスフォルディング (Johann Nepomuk Isfording) 原著のオランダ語版を訳述する。安政3（1856）年に全5巻のうち、首巻と1・2・3巻を刊行する。元恭は、「題言」につぎのようにしるす<sup>15)</sup>。

西洋醫家教一導<sup>スル</sup>子弟<sup>ヲ</sup>先<sup>ツ</sup>立<sup>ラ</sup>二學科<sup>ヲ</sup>曰<sup>ク</sup>究理二曰<sup>ク</sup>解體三曰<sup>ク</sup>生理四曰<sup>ク</sup>病理五曰<sup>ク</sup>藥性六曰<sup>ク</sup>舍密七曰<sup>ク</sup>古賢經驗

西洋医学の学科課程は、究理、解体、生理、病理、薬性、舍密、古賢経験の7科からなる。

「究理<sup>ノ</sup>學」は、「其（人身）構 - 成造 - 立之理」をあきらかにする学問である。物理学に該当する。「舎 - 密<sup>ノ</sup>學」は、「分<sup>チ</sup>下<sup>ル</sup>知<sup>ル</sup>衆 - 材之所<sup>ニ</sup>構成<sup>スル</sup>各 - 材皆<sup>ナ</sup>當<sup>ル</sup>中<sup>ニ</sup>其用<sup>ニ</sup>上<sup>ニ</sup>」学問、すなわち化学にあたる。宇田川・坪井の学統の人びとは、近代医学に接近する。しかし、元恭は蘭書にしるされた西洋医学の学科課程を紹介したにすぎない。「実験」をおこない、「観察」することにより「実効」を確認するという学問方法<sup>16)</sup>がとりいれられる可能性があったであろうか。

近代自然科学は、あくまでも実験にもとづく。時空を問わず、同じ操作をすれば、おなじ成果がもたらされる。異文化圏の日本に近代科学を移植し、定着させるためには、その理論的側面だけでなく、技術的側面もうけいなければならない。原典主義と翻訳主義が主流化するなかで、理論が先行し、実験・観察はなおざりにされる。

長与専齋は、宇田川・坪井の学統を継承する緒方洪庵の適塾において塾頭に推されるほどにオランダ語に習熟していた。緒方塾では、難解なオランダ語のテキストを解説することが塾頭になる条件であった。安政6（1859）年のある日、専齋は洪庵に「東下の志願」をつたえる<sup>17)</sup>。洪庵は、江戸の「某々先生」についてとしても、「日本流の蘭方治療」を見習うだけで、「さして益することはあるへからず」、「足下は長崎に下り蘭醫に就きて直傳の教授をうけ大成を期せらるへし」と長崎遊学をすすめる。

専齋によれば、長崎のオランダ人医師の講じる医学は、つぎのようなものである<sup>18)</sup>。

かくて日を経るに従ひ「ポムペ」の口演も略其意味を會得し、時には自己の喉舌を以て質疑問答することも出来得るやうになり、稍々事情も解するに付きつらつら學問の仕方を観察するに、従前とは大なる相違にて、極めて平易なる言語即文章を以て直ちに事實の正味を説明し、文字章句の穿鑿の如きは毫も齒牙にかくることなく、病症藥物器具其他種々の名物記号等の類曾て冥搜暗索の中に幾多の日月を費したる疑義難題も物に就き圖に示し一目瞭然掌に指すか如くなれば、字書の如きはほとんど机上のかさり物に過ぎず。日々の講義を能く理解し能く記憶すれば、日々に新たなる事を知り新たなる理を解し、復た一字一章の阻礙することなく坦々として大道を履むか如くなりき。

オランダ人教師は、毎朝、8時から10時までの2時間、伝習生が「口演」、「講釈」と呼ぶ講義をおこなう。講義は、「きわめて平易なる言語即文章」によって「事實の正味」を説明し、「病症藥物器具其他種々の名物記号等の類」も実物をしめし、図でもしめす。「疑義難題」も一目瞭然である。「講釈場」での授業をおえたのち、「病院」にうつり、10時から12時まで伝習生をひきつれ、病室を回診する。臨床講義である。「陰囊炎」、「内障眼」、「痔漏切斷」などの手術もおこなう<sup>19)</sup>。

長崎の伝習生が「机上の學問」、あるいは「摘句尋章の學」と呼ぶのは、原典主義と翻訳主義に特徴づけられる西洋医学である。蘭書の翻訳は、「異質の文明を伝統社会の固有の知的枠

組みのなかにおく」<sup>20)</sup> 試みにほかならない。蘭学者が、翻訳の難しさを実感するのは、相応する専門用語が欠如しているからだけでなく、異言語がおりなす抽象的な「理論の枠組み」を把握することが容易ではないからである。蘭書を訳述するためには、まず日本の伝統的な知的枠組みにおさまらない専門用語を理解し、概念を把握しなければならない。そのうえで、当時の学術用語である漢語あるいは漢文によって記述しなければ、「科学理論の翻訳」とはいえない<sup>21)</sup>。

萩藩医学校では、文久元（1861）年の「好生堂増補規則」<sup>22)</sup>により原書コースと訳書コースが併置される。訳書コースは、訳書により西洋医学をまなぶ課程であるが、「訳書は規模狭隘にして、隔靴之憾なき事能はず」として「少壯之輩は原書に就て学ぶにしかす」と規定する。好生堂は、周蔵の養祖父である青木周弼が手塩にかけた西洋医学校である。漢方医学は、「章句ニ拘泥し、空論を主張いたし侯事、有<sub>レ</sub>之間敷侯」<sup>23)</sup>として否定されるが、原典主義と翻訳主義は「机上の學問」、「摘句尋章の學」をうみだす。宇田川・坪井の学統をつぐ好生堂で修学した周蔵は、当初、「院ノ風習伎倆ヲ主トノ讀書ヲ疎ンス」<sup>24)</sup>としてオランダ人教師の医学伝習に拒絶反応をしめすが、専齋の「講習」にくわわることにより西欧の「学問の仕方」をまなぶ。

## 2. ドイツ医学

「防長ニ井坐」する周蔵<sup>25)</sup>は、長崎において、世界的な医学研究の動静について認識をふかめる。

佐藤尚中は、万延元（1860）年12月から文久2（1862）年1月まで1年あまり長崎に滞在し、ポンペのもとで研鑽する。尚中は、文政3（1827）年4月、下総小見川藩医山口甫仙の次男に生まれ、嘉永6（1853）年2月に佐倉順天堂創始者の佐藤泰然の養子にむかえられる。万延元（1860）年3月に佐倉藩医学所の蘭方教授に任命されるが、藩許をえて、長崎におもむく。医学伝習の責任者であった松本良順は、佐藤泰然の次男に生まれるが、幕府奥詰医師の松本良甫の養嗣子にむかえられていた。尚中は、佐倉藩伝習生であるが、良順、ポンペに厚遇される。

尚中は、ポンペの文久2（1862）年10月までの在任期間の終盤に長崎医学校に在籍したことになる。ポンペは、「最後の学課」のひとつである「手術外科学」にとりかかる<sup>26)</sup>。ポンペは、外科学の授業では「ストロマイエルの外科書」を種本にする。講義では、医者には「書籍」や「理論的教育」だけでなく、「実習」によって、はじめて「一人前の外科医」になることができる、とくりかえす。尚中は、蛙による「実験」、「牛眼」の解剖にとりくみ、「穿胸術」の練習にとりくむ<sup>27)</sup>。「日本人外科医」は、「解剖学知識」に欠けているために、手術にさいしては「狐疑逡巡し、不安を持ち、あるいは軽率に陥る」が、「さる大名の藩医である佐藤氏は事実まことに優れた外科医」、「きわめて優れた手術者」であった。尚中は、文久2（1862）

年 3 月、1 年あまりの長崎遊学をおえ、佐倉にもどる。長崎をたびだつさい、ポンベから「臚」（はなむけ）として「斯篤魯黙児之所著」の「一書」をおくられる<sup>28)</sup>。

尚中は、佐倉にかえったのち、「斯篤魯黙児」のオランダ版を訳述する。「斯篤魯黙児」、すなわちドイツ人外科医・眼科医シュトロマイヤー（Georg Friedrich Louis Stromeyer）は、ドイツ、イギリスの諸大学の外科学教授を歴任しただけでなく、軍医長、軍医総監として従軍し、傷痍兵の治療にたずさわった経験もある。シュトロマイヤーは、1844（弘化元）年に“Handbuch der Chirurgie”をドイツのフライブルクで刊行する。同書は、オランダ人「シュエルマン」（Bernardus Franciscus Suerman）によってオランダ語に訳され、1845（弘化 2）年にユトレヒトで刊行される。オランダ語版書名は、“Handboek der theoretische heekunde: heekundige pathologie en therapie”である。シュトロマイヤーは、1855（安政 2）年にはドイツのハノーヴァーで“Maximen der Kriegsheilkunst”を刊行する<sup>29)</sup>。同書も、「武器による傷痍」（Wunden durch Kriegswaffen）、「皮膚の損傷」（Verletzung der Haut）、「筋肉および腱膜の損傷」（Verletzung der Muskeln und Aponeurosen）、「神経系の損傷」（Verletzung der Nervensystem）といった内容からなる。シュトロマイヤーの戦場における軍医としての治療活動をとおして生みだされたものである。“Maximen der Kriegsheilkunst”も、「シュエルマン」によってオランダ語に訳され、1862（文久 2）年にユトレヒトで刊行される。オランダ語版書名は、“Grond der Militaire genees- en heekunde”<sup>30)</sup>である。ポンベは、オランダ語版が刊行された1862（文久 2）年の11月に離任する。尚中は、佐倉にもどったのちに、“Grond der Militaire genees- en heekunde”を入手する。

尚中は、“Grond der Militaire genees- en heekunde”の一部を翻訳し、慶応元（1865）年 5 月に上梓する<sup>31)</sup>。書名は、『斯篤魯黙児砲痍論』である。『斯篤魯黙児砲痍論』は、あいつぐ戦乱のなかで全国に流布する。

尚中は、“Handboek der theoretische heekunde: heekundige pathologie en therapie”の一部を訳述し、「慶應元乙丑歳仲冬」、すなわち慶応元（1865）年11月に開版する。続豊徳による「序」の日付は「慶應元二年丙寅春三月」である。『外科医法』として板行したのは、慶応 2（1866）年 3 月ころのことである。ポンベから餞別としておくれた「一書」は「斯篤魯黙児之此書」である<sup>32)</sup>。尚中は、シュトロマイヤーの訳書をあいついで板行する。尚中は、佐倉藩主堀田正倫の侍医として多忙であったが、閑暇をぬうように蘭書の訳述にたずさわる。尚中は、長崎滞在中、ドイツ人内科医ヴンダーリヒ（Carl August Wunderlich）の蘭訳書を訳述したりするが、佐倉に帰着したのちは、シュトロマイヤーのオランダ語訳書を会読用書として、訳述にとりくむ。

尚中は、「凡例」につきのようにしるす<sup>33)</sup>。

和蘭乃醫官ポンベ、ハァン、メールデルホールト氏、台命を奉りて、長崎に來り生徒を

誨しに外科醫方をハ、此書によりて傳へたり、余も亦吾公乃命に應して彼地に至り、其講筵に侍りけるに、別れに臨みて、此書を遣りていへらく、およそ二十年前までハ、英佛乃外科醫方、萬國に長せしを、此ストロメールとヂフヘンバック乃両傑、獨乙國に起りてより、外科術も復ひ萬國に勝れたり

オランダ海軍軍医ポンペによれば、20年まえにはイギリスやフランスの外科学が世界的な水準にあったが、シュトローマイヤーやディーフェンバッハ (Johenn Friedrich Dieffenbach) があらわれると、ドイツ外科学が世界最先進の外科学としての地位をえる。かれらは、「さまざま新しい手術法の考案、整形外科等に見るべき業績」をのこす<sup>34)</sup>。ポンペは、精得館において、イギリスやフランスの外科学を凌駕するドイツ外科学を教授する。

相良知安は、文久3 (1863) 年に長崎におもむき、佐賀藩遊学生としてボードイン (Anthonius Franciscus Bauduin) のもとでまなぶ。のちに学校権判事・大学校権大丞として、明治新政府による、いわゆるドイツ医学採用に中心的な役割を演じた人物である。知安は、天保7 (1836) 年2月、佐賀藩医の相良長美の三男に生まれる。藩学弘道館から蘭学寮に転じ、安政元 (1854) 年の冬には新設の藩医学校にうつる。文久元 (1861) 年には江戸遊学を命じられ、佐倉の順天堂に入門する。順天堂では塾頭にあげられる。文久3 (1863) 年には長崎遊学を命じられ、尚中の紹介状をたずさえ、長崎におもむく。知安は、精得館での一コマを追懐する<sup>35)</sup>。

私は當時ボードイン氏に請ふて新版の書籍を借ろうとすると、氏のいふには今日では蘭書に善いものは少ない、それは蘭國の醫生は大抵獨佛の原書に就て學ぶからである、日本でも今後の醫學は佛か獨逸に學ばねばならぬ、然に佛語と蘭語とは大分性質が違ふから習ひにくい、君等が是から學ぶには獨逸の方が便利であるとのことであつた、ボードイン氏は渾て佛蘭西びいきで、醫書も器械も乃至飲食のことまで佛蘭西流であつて、其の普佛戰爭前にも、佛蘭西びいきの傾向を示して居たに拘はらず、私共へは獨逸學を勧めたのである此ボードイン氏の獨逸學獎勵は、やがて後日に私をして我國の醫學を獨逸風に爲さしめた基であつた。

知安が長崎にたどりついたのは、「攘夷論の沸騰で公儀お醫師は皆引拂ひに成つて居た」ころ<sup>36)</sup>、すなわち幕府伝習生が長崎から江戸に退去したのちのことである。「攘夷論」とは、鹿児島藩と萩藩が諸外国にたいし武力を行使した文久3 (1863) 年の一連の事件をさす。諸外国の報復が懸念され、戸塚静伯、佐藤道碩、大槻玄俊、緒方洪哉、竹内玄庵といった幕府伝習生が江戸に呼びもどされる。長与専齋も、藩命により5月に大村藩に帰藩する<sup>28)</sup>。知安は、幕府伝習生がすべて帰府していたために、幕府伝習生の門人としてボードインの授業を「傍聴」するのではなく、ボードインから「自由勝手に傳習を得た」。知安は、「今迄の机上の學問は、ボードイン氏に就くに及むで初めて生命を與へられた」<sup>37)</sup>。

知安は、ボードインから医学研究の世界的動向について実情をつたえられる。ボードイン

によれば、19世紀中葉の医学研究のレベルは「独仏」が抜きんでている。オランダにおける医学研究レベルは低く、オランダの医師は「独仏の原書」により医学をまなぶ。ボードインは、さらにオランダ語とドイツ語の言語的な近親性に言及する。フランス語は、インド・ヨーロッパ語のひとつであるラテン語にさかのぼるロマンス語系の言語である。オランダ語は、ドイツ語や英語の共通のゲルマン祖語から生まれた言語である。オランダ語は、フランス語とは「大分性質が違ふ」。オランダ語を習得した日本人にとっては、ドイツ語を習得し、ドイツ医学をまなぶほうが有利である。ボードインは、「佛蘭西びいき」であるが、知安には「獨逸學」をすすめる。

徳島藩遊学生の大井長義は、慶応4（1868）年3月、藩命により帰藩する。7月には、新政府の議定官を命じられた藩主蜂須賀茂韶に随従し、江戸におもむき、明治3（1870）年1月には大学東校の少寮長心得を命じられる。同年9月、3ヶ月の契約で雇用されたボードインが大学東校において講義を担当することになり、長義もボードインの「原生學」の講義を聴講する。長義は、帰国をひかえたボードインから「今日醫學を學ぶにはどうしても獨逸に留學せねばならない」とつげられる<sup>38)</sup>。

おわりに

明治初年のドイツには、長崎の医学伝習生が藩費留学生、大学東校留学生として参集する。青木周蔵、萩原三圭は明治改元以前に長崎を旅だった最初期のドイツ留学生である。かれらは、それぞれの専門分野において「百科研究の盛なる事実」の背景に、学問研究において実験的・実証的な方法が採用されていることを知る。大学では、「講釋中必ず多少の試験を添ゆ」。とくに自然科学は、「厚根實物に就て終る學」であるために、「一に試験を以て教ゆ」。そのために、学生は「不勞て明瞭に解し得、隨て記憶も致し易」い。こうした実験的・実証的な方法によって、「紙上の學問とは其功用同日の論に非ず」とわれるほどの研究成果が生まれる<sup>39)</sup>。

19世紀後半のドイツは、世界の科学研究を先導していた。医学は医科学にほかならない。それは、人体の自然科学的認識を基礎におくからである。ドイツでは、医学のすべての分野で研究所が設置され、自然科学、とりわけ物理学と化学の実験がくりかえされる。生理学は、「生体の機能、すなわち生物の体の働きを研究する自然科学の一分野」（日本大百科全書）であり、自然科学の研究の進展を前提としなければならぬ。

オランダは、19世紀中葉には科学研究のドイツ・モデルを導入する<sup>40)</sup>。長崎の伝習生がオランダ人教師にまなんだのは、ドイツ留学生がまなんだ「科学」とおなじ地平にあるものである。原典主義と翻訳主義のなかではぐくまれた長崎の伝習生は、「机上の学問」と呼んだ伝統的な学問方法から「事実の正味」を研究対象とする「学問の仕方」へと転向する。

【註】

- 1) 相良翁口述，社員筆記，「相良翁懷舊譚」14，『醫海時報』第518号，明治37年5月，376頁。
- 2) 「瓊浦日抄」慶応丁卯，徳島大学薬学部長井長義資料委員会，『改訂長井長義長崎日記』，徳島大学薬友会出版部，2003年，95頁。
- 3) 「例言」，老楞佐・協乙速の盧著撰，杉田茂質（玄白）起業，大槻（玄澤）訳，『瘍医新書』誘導篇首巻，文政8年刊，青藜閣，岡山大学附属図書館鹿田分館医学資料室所蔵。
- 4) ハイスターの経歴については，『大槻玄沢の研究』（洋学史研究会編，思文閣出版，1991年，47～53頁）を参照した。
- 5) Lorenz Heister, Heelkundige onderwyzingen, Amsteldam Isaac Buyn, 1776. 国際日本文化研究センターDB。
- 6) 『瘍医新書』誘導篇巻之一，傍線部割注。
- 7) Lorenz Heister, Chirurgie, In welcher Alles, was zur Wund-Artzney gehöret, Nach der neuesten und besten Art, Nürnberg 1724, SS.24-25. バイエルン国立図書館デジタル。原典は，いわゆるドイツ文字（Fraktur）でしるされるが，ローマ字におきかえた。
- 8) 杉田玄白，『狂医之言』，『日本思想史大系』64，岩波書店，1976年，234頁。
- 9) 「序」，『瘍医新書』誘導篇首巻。
- 10) 蘭化撰，『管蠡秘言』，写，書写年不明，安永6（1777）年序の写本，早稲田大学図書館洋学文庫所蔵。
- 11) 杉田玄白，『蘭学事始』上之巻，天真楼，明治2年，19丁，早稲田大学図書館洋学文庫所蔵。
- 12) 高田真治・後藤基巳訳，『易经』下，岩波書店，287頁。
- 13) 「『学部』の争い」準備原稿，高坂正顕・金子武蔵監修，『カント全集』第16巻，理想社，昭和41年，425頁。
- 14) 川喜田愛郎，『近代医学の史的基盤』上，岩波書店，1977年，405頁。
- 15) 「題言」，広瀬元恭訳，『理學提要』首巻，時習堂蔵版，安政三年丙辰初夏官許，国立国会図書館デジタルコレクション。
- 16) 「序」，『瘍医新書』誘導篇首巻。
- 17) 長与専斎，長与称吉編刊，『松香私志』上巻，明治35年，15頁。
- 18) 同上書，19～20頁。
- 19) 「瓊浦日抄」慶応丁卯，徳島大学薬学部長井長義資料委員会，『長井長義長崎日記』改訂版，徳島大学薬友会出版部，2003年，41頁。
- 20) 吉田忠，「『解体新書』から『西洋事情』へ」，芳賀徹編，『翻訳と日本文化』，国際文化交流推進協会，2000年，70頁。
- 21) 辻哲夫，『日本の科学思想』，こぶし書房，2013年，16頁。
- 22) 「部寄」文久元年，「毛利家文庫」，山口県文書館所蔵。
- 23) 萩藩好生堂「醫學修業規則」規則原案，岡原義二，『青木周弼』，青木周弼先生顕彰会，昭和16年（大空社，1994年復刻），216～219頁。
- 24) 「野稿一章」，青木周蔵上書，木戸執事宛，丁卯季夏，「田村哲夫文庫」，「諸家文書」，山口県文書館。
- 25) 慶応3年6月28日付，日野宗春宛書簡，「日野家文書」，「諸家文書」，山口県文書館所蔵。
- 26) 沼田次郎・荒瀬進訳，『ボンベ日本滞在看聞記』，雄松堂書店，昭和43年，346～347頁。
- 27) 関寛斎，『長崎在学日記』萬延元年～文久2年，ペン字写本。
- 28) 続豊徳撰，「序」，ロウイス・ストロメール著，シュエルマン訳，舜海佐藤尚中訳述，『外科医法』，慶応元乙丑歳仲冬新雕，濟衆精舎蔵，岡山大学附属図書館鹿田分館医学資料室所蔵。
- 29) Georg Friedrich Louis Stromeyer, Maximen der Kriegsheilkunst, Hannover Hahn, 1855. “The Internet Archive” が公開するドイツ語版原典を利用した。
- 30) 宮下三郎，『和蘭医書の研究と書誌』，井上書店，平成9年，120頁。
- 31) 斯篤魯黙児著，シュエルマン訳，佐藤尚中重訳，『斯篤魯黙児砲痰論』巻1，慶応元乙丑仲夏新，嶋村屋利助，岡山大学附属図書館鹿田分館医学資料室所蔵。
- 32) 「序」，『外科医法』。
- 33) 『外科医法』。

- 34) 『近代医学の史的基盤』下, 岩波書店, 1977年, 626頁。
- 35) 「相良翁懷舊譚」15, 『醫海時報』第521号, 明治36年6月, 433頁。
- 36) 「相良翁懷舊譚」14, 376頁。
- 37) 「相良翁懷舊譚」15, 376頁。
- 38) 長井長義, 高野一夫訳, 「自叙伝」, 金尾清造, 『長井長義傳』, 日本薬学会, 昭和35年, 76頁。
- 39) 父琳章宛書翰, 明治6年1月9日付, 「伯林消息」, 金尾清造, 『長井長義伝』, 日本薬学会, 昭和35年, 99頁。
- 40) K. ファン・ベルケル, 塚原東吾訳, 『オランダ科学史』, 朝倉書店, 2000年, 109頁。

## Zusammenfassung

### Über die deutsche Medizin in Nagasaki

MORIKAWA Jun

Seit 1864 verfeindet sich die Hagi-Regierung mit der Tokugawa-Regierung. In Nagasaki kann Shūzo Aoki keine Vorlesungen in der europäischen Medizinschule besuchen, die die Tokugawa-Regierung begründet und erhält. Shūzo nimmt die Unterrichten der europäischen Medizin beim Leibarzt des Ohmura-Clansherrn Sensai Nagayo, der bekannt als hochbegabter Student in der europäischen Medizinschule ist. Er lernt indirekt die Vorlesungen von den holländischen Ärzten. In dieser Studie möchte ich erklären, welche Unterrichten über Medizin die holländische Ärzte hielt.